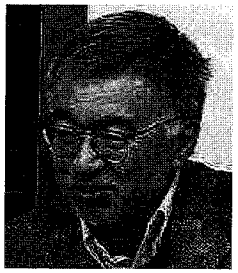
アマスト大学の心

手島勲矢



奨励者紹介〔てしま・いさや〕
日本学術会議連携会員／ユダヤ教文献学
元同志社大学大学院 神学研究科　教授

【指揮者によって。賛歌。ダビデの詩。】
天は神の栄光を物語り／大空は御手の業を示す。
昼は昼に語り伝え／夜は夜に知識を送る。
話すことも、語ることもなく／声は聞こえなくても
その響きは全地に／その言葉は世界の果てに向かう。そこに、神は太陽の幕屋を設けられた。

（詩編一九編一～五節）

いつも、息が白くなり始めるころ、広葉樹が色を鮮やかに変えるころになると、ニューイングランドの町々やアマスト大学のチャペルが懐かしく思い出される。今年は、とりわけ北星学園の樹々の錦を見ながら、その事が思わされてならない。勉強に疲れると、また生活に悩むと、車を飛ばして出かけて行ったのが、内村鑑三先生が祈ったジョンソン・チャペルであり、新島襄先生の肖像画を目の前にして、誰もいない、静かな真っ白な礼拝室に降り注ぐ陽光の光の中で、賛美歌を歌うだけでも十分に癒されたことを思い出す。

またアマストを訪ねたら、その町はずれにある公共の墓地にもしばしば立ち寄った。そ

ここには北海道に教えに来たW．S．クラーク先生（一八二六―一八八六）が葬られている。その墓の後ろには桜の木も植えられていた。また、そこから少し離れたところに、クラークやシーリーがアマストの学生であった頃に学長をしていたエドワード・ヒッチコック先生（一七九三―一八六四）の墓もある。尖塔の形の目立つ墓である。そこに以下のような言葉が刻まれている。

Edward Hitchcock,
Pastor in Conway,
President and professor in Amherst
College.
A Leader in Science.
A Lover of man.
A Friend of God.
Ever Illustrating
The Cross in Nature

And Nature in the Cross.

（訳：エドワード・ヒッチコック
コンウエイの牧師
アマスト大学の教授にして学長
科学におけるリーダー
人間を愛する者
神の友達
（彼が）永遠に解説を続けた事は、
自然の中に十字架があり、
そして十字架の中に自然があるということ。）

初めてこれを見た時、私には、最後の一節が奇妙であった。《自然の中に神がいる、神の中に自然がある》ならば、汎神論の解説として既知のアイデアだけれども、《自然の中に十字架がある、また十字架の中に自然がある》とは、どういう意味か？「自然」と「十字架」

は座りの悪い一組の言葉のように、その頃は思えた。だが、思い返してみれば、大学院で学ぶうちに理神論的な考え方が身についていたから、そう思えたのであるが、むしろ、これこそは、まさにユニバーシティの精神とは一線を画する、神の被造物としての、人間らしい人間を作る教育―つまりカレッジ精神をよく表す一節であるのだと、今は一人合点してる。

十字架は、人間の救いがたい罪とキリストの贖いの象徴であり、また人間という矛盾の存在のシンボルである。だから「自然の中に十字架がある」と説く心は、愚かで弱い人間の矛盾を抜きに神の創られた自然はあり得ないという主張であり、また「十字架の中に自然がある」と教えることは、神が「とても良い」と作られた自然が、その不完全な人間の中にもあるという主張に他ならない。こう理解するなら、晩年は嫌われ者となったクラークの毀誉褒貶な人生も、アマスト・カレッジの心の表れであると、ヒッチコックは許したのではないだろうか。

詩編一九編二節には「天は神の栄光を物語り、大空は御手の業を示す」（新共同訳）とあるが、天と大空が、上から下を見て、神の創られた海や山の大自然の荘厳さの中にある神の仕事の栄光を賛美しているイメージ、いわば人間不在の自然に対するオマージュのよう

にもとれる。だが、ヒッチコックの「自然の中の十字架」の目線に立てば、詩編一九編の大空が「告げる（マギード）」「御手の業（マアセ・ヤダヴ）」とは、人間のことであり、神の栄光であると期待されながらも、罪深い存在でしかない、その矛盾に満ちた被造物＝人についての詩と読めなくもない。

すなわち不完全な、罪の誘惑に弱い、また悪しき存在にしか見えない人間ではあるけれども、イザヤ六四章七節「しかし、主よ、あなたは我らの父。私たちは粘土、あなたは陶工、私たちは皆、あなたの御手の業」とあるように、なおも大空は、神の御手の業として地上の人間に期待し告げるのであり、またイザヤ六〇章二一節「あなたの民は、皆、義人であり、永久に地を受け継ぐ。（皆）輝くべき私の植えた新芽、私の手の業である」（私訳）のように、天は、神の栄光であれ！と人間に無言で語りかけている等、言外の詩人の思いをあれこれ想像してもみる。しかし、アマストにとっての「御手の業」「神の栄光」は、間違いなく、他人の目には失敗に見える一生だとしても、「わが口の言葉と、わが心の思いが、あなたの面前において、喜ばれるものになりますように。主よ、わが岩、わが贖い主よ」（私訳、詩編一九編一五節）と祈り生きる人すべてが含まれるものと私は信じている。

（二〇一六年一〇月二七日）